

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	呉 江城
論文題目	現代中国の社会変動と「小資」——多様な媒体・アクターに注目して——		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、現代中国社会の社会変動のもと形成された都市新中間層にかんする分析である。とくに、新中間層をあらわす概念の一つである「小資」に注目し、「小資」概念の変容・展開・衰退について、多様な媒体・アクターに注目しつつ、詳細に検討したものである。論文は、3部構成である。「第1部 「小資」概念の変容：都市新中間層との結合」では、「小資」概念の語源である「小資産階級」にさかのぼり、「小資産階級」から「小資」への変容について分析している。「第2部 「小資」概念の展開：都市新中間層のメディア文化の創出」では、2000年代半ばまでの、複合メディア環境における「小資」文化の創出が扱われる。「第3部 「小資」概念の衰退：都市新中間層との乖離」では、2000年代半ば以降の、「小資」概念と都市新中間層との乖離が明らかになる。各章の要約は以下のとおりである。</p> <p>「序章： 「小資」を構築する」では、本論文の研究背景、問題意識と研究目的、先行研究、研究資料と構成について述べられる。1990年代以降、中国社会では「社会転型」が加速し、それとともに誕生・勃興した都市新中間層が注目を集めた。特に、1990年から2019年にかけて、中国の都市新中間層が厚みを増していくが、そのような中で、都市新中間層についての様々な概念が登場し、呼称が複雑化した。その中でも、本論文では、「小資」という概念に注目し、研究目的を以下のように定める。一つは、中国独自の概念である「小資」概念の変容・展開・衰退を分析することにより、様々なアクターと様々な媒体によってなされる「小資」構築のメカニズムを明らかにする、ということである。二つは、1990年代以降の中国の社会変動（イデオロギー統制の緩和、情報化、グローバル化、消費社会化）がどのように「小資」概念に影響を与えたかを考察することである。</p> <p>「第1章 『人民日報』における「小資産階級」概念から「小資」概念への変容：階層の実態とイメージの関係に着目して」では、「小資産階級」から「小資」への転換に焦点が当てられる。「小資」は「小資産階級」を語源とするが、「小資」への転換とともに、概念の脱政治化、消費イデオロギーとの結合がみられた。</p> <p>「第2章 「小資」文化の担い手の文化資本獲得： エリート大学生を取り巻く教育制度と学生文化に着目して」では、「小資」文化生産の担い手としてのエリート大学生に焦点が当てられる。1980年代の高等教育改革と「文化熱」を社会的背景としつつ、かれらがどのように文化資本を獲得したか、またその獲得方法は「小資」文</p>			

化の特性とどのように関係しているのかが明らかにされる。

「第3章 「小資」文化の生産体制の整備： エリート大学生のメディア進出に着目して」では、複合メディア環境のなかでつくられた「小資」文化の特徴、エリート大学生の果たした役割について分析される。「小資」文化の生産体制は、中産階層的雑誌・新聞、ポータルサイト、「小資」図書という3つの要素からなった。エリート大学生は、文化資本をもとに、都市新中間層的ジャーナリズムを形成することにおいて中心的役割を果たしたことが明らかになる。

「第4章 「小資」文化の「中間性」の規定と相対化： 『上海壹週』の分析を中心に」では、『上海壹週』を分析材料に、「小資」文化がほかの階層文化とどのように差異化を達成したかが検討される。エリート大学出身のメディア従事者に焦点を当て、メディアの経営方針・編集方針、さらに、コンテンツの選定において、かれらの文化資本と「小資」文化の関係について分析される。その結果、かれらは、文化的ヒエラルキーの形成を通して、「小資」文化とほかの文化との差異化・卓越化に寄与したことが明らかになった。

「第5章 マスメディアにおける「小資」概念の衰退： 『南方都市報』・『広州日報』・『羊城晚報』の「小資」言説の変容を手掛かりに」では、『南方都市報』・『広州日報』・『羊城晚報』の「小資」にかんする言説を分析材料に、中国社会の都市新中間層に対する認識がどのように変化したか検討される。その結果、消費社会化の急激な進展とともに、「小資」概念は、萌芽期・発展期・衰退期を経たのち、結果として、都市新中間層との結びつきを弱めるにいたったことが明らかになる。

「第6章 ソーシャルメディアにおける「小資」概念の衰退： 「豆瓣網」の「小資」文化の変容を手掛かりに」では、2005年以降のソーシャルメディアを対象に、都市新中間層向けの「小資」文化の生産体制と変容が明らかにされる。その結果、Web2.0の技術革新が、ユーザー中心型のコンテンツ生産方式を形成するとともに、コンテンツの限定性が徐々に薄まり、ソーシャルメディア上の「小資」文化は大衆文化と融合していったことが明らかになった。

「終章： 「社会転型」のなかの「小資」」では、今までの分析をもとに、本論文が明らかにしたことについてまとめられる。一つは、「小資」の構築のメカニズム」にかんしてである。本論文の分析により、市場経済体制がもたらした商品化ロジックが、多様な媒体・アクターに共通して受け入れられ、政治的無関心、消費への熱狂という中国の都市新中間層の性格を形作ったことが明らかになった。二つは、「小資」の構築と社会変動」についてである。本論文の分析により、中国の近代化の特質である「圧縮性」、より具体的には、①情報化、②グローバル化、③消費社会化の各側面における「圧縮性」が「小資」の構築に影響を与えたことが明らかになった。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、現代中国社会の都市新中間層についての考察である。これまで、欧米や日本、中国の新中間層について研究は多く行われてきたが、本論文のように、中国社会の新中間層について、「小資」という具体的概念をとりまく現象に焦点を定め、その展開について綿密に分析した研究はほとんどない。本論文では、多様な媒体・アクターに注目し、「小資」の変容・展開・衰退を分析することにより、「小資」の構築のメカニズムが立体的に分析された。その分析により、1990年代以降の中国の社会変動のあり方と「小資」の関係について解明することが可能となった。以下、本論文の意義について述べる。

第一に、これまで、中国社会の変動とともに都市新中間層がどのように形成され発展・変容してきたかについての詳細な分析が不足していたのに対し、本論文は、中国社会の都市新中間層を表す「小資」概念という具体的対象を定め検討することにより、独創的な視点から分析が可能となったことである。本論文が対象とする「小資」にかんしては、これまでも分析があったが、多くは、「小資」にかんする社会現象を一時的なものとした分析や実証性に不足のある分析であり、本論文のように、「小資」の構築過程について、中国社会の長い社会変動との関係で実証的に考察したものではない。この点において、本論文の独自性が高く評価される。

第二に、「小資」概念の変容・展開・衰退という各段階の特徴を明確にすることにより、都市新中間層の形成について、網羅的に、かつ、ポイントをおさえて分析することが可能になったという点である。本論文は、「小資」について、変容(1949-1990年代)、展開(2000年代半ばまで)、衰退(2000年代半ば以降)のそれぞれにかんして、主要アクター・媒体を対応させ、それぞれの時代の特徴を抽出している。変容期については、機関紙という媒体における、「小資産階級」から「小資」への転換、および、「小資」概念と都市新中間層との結合に焦点があてられる。展開期については、複合メディア環境における「小資」文化の生産に焦点があてられる。衰退期については、マスメディアにおける「小資」概念と都市新中間層との乖離、および、ソーシャルメディアにおける「小資」文化の変容に焦点があてられる。本論文は、非常に長い期間を扱っているが、中国社会やメディア環境の変化に照らし合わせつつ、その時代ごとに用いるべき資料と分析方法を的確に選出することにより、「小資」にかんする社会現象について、包括的に、かつ、焦点を定めて分析することが可能になっている。このことにより、「小資」の構築について、各時代の特徴とともに、それらを統合するメカニズムについても明らかになった。

第三に、新中間層文化の内実の分析とともに、その文化の創出における重要な担い手となる人々についての分析を行っている点である。高等教育改革と「文化熱」

という社会背景のもと当時のエリート大学生が獲得した文化資本の様相に注目した第2章など、新中間層文化がどういった人々により形成され、そのことがどうい
う影響を与えたのかが詳細に明らかにされたことには大きな意義がある。

第四に、「社会転型」というマクロな社会変動と「小資」文化というミクロな現象とを統合することで、現代中国社会の変化の様相をダイナミックに考察できたことである。本論文では、現代中国における社会変動の特徴を「圧縮性」、より詳細には、情報化、グローバル化、消費社会化の各側面における圧縮性にみとめ、このような「圧縮性」と「小資」文化との関係について考察している。このことにより、本研究は、欧米や東アジア地域との比較研究の可能性も示している。

試問では、主に、以下のような議論が行われ、課題が示された。まず、同じ東アジア地域である日本の都市新中間層との比較可能性について、本論文の考察をふまえてより詳細に議論した。これについては、本論文はまずもって現代中国社会の新中間層についての研究であることから、本研究で得られた知見の価値をみとめつつ、今後の比較研究にむけての発展的課題として議論されたものである。また、都市新中間層文化についてジェンダー的側面からのアプローチも今後いっそう重要となるであろうことが指摘された。また、本論文は、各章で取り扱う資料が異なるが、それゆえに、資料選定について一貫した理由を明確にする必要があるという指摘がなされた。また、現代中国社会の変化、特に消費社会化に注目し詳細に分析した本論文の意義を認めつつも、消費社会化が人間にもたらす影響についてのより深い考察の必要性・可能性についても述べられた。たとえば、

「消費し享樂する主体」の成立がうむ新たな社会問題、欲望の解放と同時に生まれる苦悩にかんする最近の社会現象について議論が行われた。論文の分析結果について深く考え発展させていく上で重要な指摘であり、今後の考察にむけての貴重な指針として本人にうけとめられた。試問では、このように、質疑応答や議論をふまえ、いくつかの課題が示された。しかし、これらの課題は、本論文で得られた知見をもとに、さらに新たな研究を発展させていくための材料となるような発展的課題として指摘されたものであり、博士学位論文としての本研究の価値をいささかも減ずるものではない。よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年3月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降